



巻頭言

SDGs 達成と農学国際協力の役割

田和正裕

大阪大学 社会ソリューションイニシアティブ 教授

国連が発表した「持続可能な開発目標（SDGs）報告 2024」によれば、2030 年までの目標達成には大きな遅れが生じ、169 のターゲットのうち、評価可能なターゲットにおいて現時点で順調に進んでいるのはわずか 17%にとどまり、半数近くは最低限の進捗、3 分の 1 以上は停滞または後退している。この現状に国連のグテーレス事務総長は、2030 年の SDGs の目標達成について「達成する見込みには遠く及ばない」と強い危機感を表明した。

進捗が顕著に遅れているのは、目標 2「飢餓をゼロに」、目標 8「働きがいも経済成長も」、目標 13「気候変動に具体的な対策を」であり、その主な原因は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミック長期化、紛争や政治的緊張、気候変動の影響である。これらの 3 つの目標は食料供給と価格の安定、栄養改善、環境にやさしい農業生産、地球温暖化への適応など、いずれも持続可能な食料システムへの変革が鍵となる。

農林水産業は、世界労働人口の約 27% がこの分野に従事し、発展途上国では主要な雇用源であるほか、持続可能な農業や漁業は、食料供給の安定化、栄養不足の解消の点でも重要なセクターである。また、森林や海洋資源の管理は、気候変動の緩和や生物多様性の保全に直結するなど、農林水産業は SDGs のターゲットや指標に最も多く関係している。

同様に農林水産業は、国内外の食料安全保障、栄養改善、地球温暖化の緩和・適応、環境保全、経済成長、文化継承、社会の紐帯などの多様な課題に関連し、これまでのセクターの枠組みを超えて、技術革新の促進、地域ごとの最適アプローチ等の観点からより長期的、かつ包括的な視点で持続可能性を考える必要がある。このため、SDGs の達成には農学国際協力に関わる我々の役割と期待は極めて大きいといえる。

現在、世界では、遅れている課題の取り組みの加速化、そして新たな課題への対応、ポスト SDGs アジェンダ（SDGs + beyond）についての議論が既に開始されている。

日本においても、世界中の声に耳を傾け、SDGs の様々な課題について産官学民のアクターと小学生から大学生までの若者が一緒になって、食と農、防災、エネルギー、ジェンダー、貧困など様々なテーマにおいて議論と協働を行う「いのち会議」という活動が始まっており、取りまとめられた意見を今年、大阪・関西で開催される 2025 年日本国際博覧会において宣言として発信する予定である。

SDGs、中でも持続可能な農業の実現には、多分野の研究者、企業、農業者、政府、市民が密に連携し、課題解決に取り組む必要がある。本誌「農学国際協力」の創刊から 22 年、「農学知的支援ネットワーク（JISNAS）」の設立から 15 年が経ち、多くの関係者が研究・プロジェクト活動の知見の受発信・蓄積・共創を行ってきた。これら関係者が今後「いのち会議」などのプラットフォームとも協働し、SDGs + beyond に貢献することもさらに重要となって来よう。関係者の皆様の「農学国際協力」のさらなる発展に向けて議論と参加が活発になることを期待したい。